

2026 受難週 祈りの課題

3/30日(月) マルコ 11:1-11 エルサレム入城(ちいろば)

エルサレムに入るイエスを、人々は「ホサナ(救いたまえ)!と叫び、王様の象徴である棕櫚の葉を振って迎えた。“王さまバンザイ!”..しかしその姿は“王”のイメージからはかけ離れたものだった。イエスは力強い軍馬にではなく、ロバの子に乗って行かれたのだ。力や強さによって救いをもたらすのではなく、弱さを絆につながり合うことが救いにつながってゆく…。ロバの子に乗って進むイエスの姿はそんなことを表している。

大きな力を出せないロバの子。でもその小ささ・弱さをイエスは用いられた。「わたしはこんなことしかできません」と拒むのではなく、「こんなことならできます」と受け入れること。イエスを背に載せて歩むロバの子は、そんな生き方を象徴している。

31日(火) マルコ 11:15-19 イエスの宮清め(神殿肅清)

イエスはエルサレムに着くと、神殿で商売をしていた人の売り台をひっくり返し、彼らを追い出して言われた。「わたしの家はすべての人の祈りの家。あなたたちは、それを強盗の巣にしてしまった」。イエスは何に憤っておられるのだろうか。「両替」とは“汚れた”異邦人の貨幣を“清い”ユダヤのものに交換すること。神殿で異邦人差別がまかり通っていた。「鳩」は神殿での献げもの。金持ちは牛や羊を献げたが、貧乏人は鳩しか買えなかった(格差)。しかも献げた瞬間、飛んで逃げ去り元の小屋に戻る...そういった形で搾取が行なわれていた。旧態依然とした「祈りの家」の在り方にイエスの怒りが向けられる。このイエスの振る舞いは、現代で言うなら「ある国の大使館前でその国の国旗を焼く」に等しい行為だ。これをきっかけにファリサイ派たちのイエスへの憎悪は一気に膨らむ。しかしイエスは、神殿の歪んだ姿に黙っていられたのだ。

4/1日(水) マルコ 14:12-26 最後の晩餐

弟子たちとイエスとの最後の晩餐の場面である。弟子たちには「これが最後」という自覚はなかったが、イエスにはその覚悟があった。最初に語られたのは、ユダの裏切りの予告。「裏切るその人は生まれなかった方がよかった」という言葉は、冷たく心に突き刺さる。本当にイエスがこんなことを言われたのだろうか...という思いが残る。後半ではペトロ離反を示す予告もなされる(27節以降)。ペトロは否定するがイエスはペトロの弱さを知っておられた。しかし大事なものは、そのようなユダもペトロも、食卓の交わりから排除されていないということだ。パンをイエスの体、盃(ぶどう酒)をイエスの血として受けとめるこの交わりは、その後聖餐式の原型となった。それは「救われた者を招く特権的な食卓」ではなく、「弱さゆえに主を(神を)裏切る罪人を招く食卓」なのである。

2日(木) マルコ 14:32-42 ゲッセマネの祈り

ゲッセマネで祈るイエスの姿は、祈りの真髄、さらに言えば神を信じて生きる信仰の真髄を私たちに示す。第一の祈り=「この杯(苦難の死)を取り除けて下さい」...イエスは決して鋼の心を持った超人ではなかった。ここにあるのは私たちと同じ生身の人間の姿である。第二の祈り=「しかし私の思いではなく、みこころが行われますように」...自分の願いが叶うことではなく、神のみこころがなされることを祈ること...それが信仰の究極的な姿である。この第一の祈りと第二の祈りは緊張関係にある。その二つの祈りを、イエスは血の汗流しながら祈り、そして十字架への道に向かわれた。私たちと同じ生身の心を持った人が、祈りながらこのように歩まれた。ここに私たちへの問いかけが生まれる。「あなたはどうか生きるのか?」と。

3日(金) マルコ 14:53-72 ペトロの否認

逮捕された後の裁判で、イエスは何の弁明も命乞いもせず、淡々と静かに裁きに向き合われる。神のみこころにすべてを委ねた人こそ、その静けさを持つことができる。

一方、逮捕の時にはイエスを見捨てて逃げ去った弟子たち。ペトロだけは気になって、身を隠して遠巻きに裁判を見に行った。ところが周囲の人から「お前もあいつの仲間だろう?」と追及され、イエスとの関わりを否定してしまう。それも一回だけではなく三度も。すると途端に鶏の鳴く声が聞こえた。ペトロは最後の晩餐の席で「鶏が二度鳴く前に、あなたは私を三度知らないというだろう」と言われた言葉を思い出し、外に出て激しく泣いた。情けない姿である。しかしこの涙こそ、彼のターニングポイントとなった。

その後ペトロは立ち直り、初代教会の指導者となり、最後はイエスと同じように十字架に架けられても信仰を貫いた。それは彼が立派な人間だったからではない。自分の弱さを知りつつ、その罪を赦して下さったイエスの、そして神さまの愛を知ったからである。